

韓国立正佼成会に焦点を当て、その現状と「倭色」宗教としての立場について新聞記事を通して検討し、韓国社会の反応を試みたい。これまでは韓国で「倭色」宗教といえば、代表的に創価学会、天理教、日蓮禪宗などを指していたが、これらを論じることは、韓国社会のメディアによって構築された枠組の中の議論という点が限界である。したがって本研究では、韓国メディアからそれほど注目されてこなかった韓国立正佼成会という小規模教団を研究対象として、より多様な観点から「倭色」宗教をとらえてみたい。

在日大韓基督教会と韓国系キリスト教会の日本宣教

中西 尋子

一 はじめに

キリスト教信者が人口の1%に満たない日本において、一九九〇年代以降、韓国系キリスト教会が活発な宣教活動を展開し、日本各地に教会が設立されている。どれくらい数の韓国系キリスト教会があるか実態は未だ明らかになっていないが、『クリスチャン情報ブック二〇一〇』（いのちのことば社）の教会情報から韓国系キリスト教会と思われる教会を抽出すると、およそ二〇〇〜三〇〇程度の教会があることが推察される。

信者の多数はニューカマーの韓国人であっても、教会によってはある程度の日本人信者を獲得している教会もある。日本人信者の獲得に成功している教会はそれが可能にしたのだろうか。そこで本発表では、時期を異にして朝鮮半島から流入した二つのキリスト教、在日大韓基督教会と韓国系キリスト教会

の日本宣教や礼拝のあり方から日本人信者の獲得の要因を探る。この二つを比較する理由は、出所は同じ韓国キリスト教でありながら、先に流入した在日大韓基督教会よりも後に流入した韓国系キリスト教会のほうが日本人信者の獲得に成功している教会があるからである。比較する教会は、在日大韓基督教会の大阪西成教会（一九二三年設立）と韓国系キリスト教会の大阪オンヌリ教会（二〇〇〇年設立）である。

二 在日大韓基督教会―大阪西成教会

大阪西成教会は現在でも韓国語による礼拝を行っている。かつて在日韓国人の一世が信者の多数を占めていたときは韓国語による礼拝が当然であったが、在日韓国人社会の世代交代とともに徐々に日本語使用の機会が増している。しかし礼拝の言語を全面的に韓国語から日本語へ切り替えようとする動きは見られない。在日大韓基督教会にはかつて内鮮一体の国策のもとで日本語使用が強制されたが、それに抗して韓国語で礼拝をまもった歴史がある。韓国語は伝達手段としての言語というよりアイデンティティの拠り所であった。それだけに韓国語を理解しない世代が信者の大部分を占めるようになってからも韓国語による礼拝が続けられている。

三 韓国系キリスト教会―大阪オンヌリ教会

大阪オンヌリ教会では、信者の三分二はニューカマーの韓国人である。しかし日曜日のもっとも中心となる一時からの礼拝は日本語で行われる。ニューカマーといってもみな日本語をある程度理解するので同時通訳を聞いている人はほとんどおらず、日本語で礼拝が行われることについて尋ねても「みんな日

本に長く住んでいるから」「ここは日本だから」と日本語使用に違和感はないようである。また大阪オンヌリ教会で初めて執事が任命されるときに行われた「執事任職礼拝」(二〇〇九年二月三十一日)や信徒総会(同年三月一日)もすべて日本語で行われた。在日大韓基督教会と異なり、韓国語へのこだわりは全く見られない。

四 おわりに

礼拝における日本語使用という点において両者には違いが見られた。この違いは両者が流入した社会的背景による。植民地支配下に流入した在日大韓基督教会は民族主義的な性格を形成し、宗主国と従属国という関係がない中で流入した韓国系キリスト教会は日韓の歴史的関係を抜きにして普遍主義的な性格でもって宣教を行う。出自は同じ韓国キリスト教でありながら大阪オンヌリ教会が大阪西成教会よりも日本人信者を獲得できているのは、徹底した日本語使用によると考えられる。

朝鮮学校教員家族における祖先祭祀

猪瀬 優理

本発表の課題は在日朝鮮人の家族における二〇〇〇年代初頭現在の祖先祭祀(以下「チェサ」と記す)の実施状況に見られる変容とその意味について考察することである。

チェサとは、朝鮮半島を中心として行われている亡くなった先祖に礼を捧げる儀式だが、本発表ではチェサの担い手として、朝鮮学校教員の家族に着目する。朝鮮学校は民族を重視する教育の場ではあるが、チェサは基本的には各家庭の祖先祭祀

儀礼であるため、チェサの実施の程度と朝鮮学校教員であることとの直接的な関わりはない。ただ、本発表では、チェサの実施を意識的に行う可能性が高い層として朝鮮学校教員家族を捉える。

従来、チェサは朝鮮民族の民族性の表象として捉えられており、民族的アイデンティティとチェサの関係を問う視点は重要である。しかし、本発表では、社会変動と祖先祭祀の変容との関係をみるため、家族像の変容という観点からチェサの変容を検討する。

東北・北海道地区および関東地区の朝鮮学校数校からの協力を得て、それぞれの学校に所属する複数の朝鮮学校教員からそれぞれの家族・親族の冠婚葬祭について、特にチェサを中心として聞き取りを行った。調査は二〇〇八年から二〇〇九年にかけて実施した。

全対象二二名のうち、二〇歳代が一名と半数を占め、五〇歳代は二名、六〇歳代は一名のみである。在日二世に当たる人が六名、三世に当たる人が十六名である。また、父方あるいは母方の既婚者の大部分が在日同胞と結婚している。

二二名の回答者のうち、家族・親族がチェサを実施していると回答したのは十八名であった。四名は家族・親族がチェサを実施していないと回答した。

聞き取り調査の結果から読み取れた具体的な変容は、旧暦ではなく西暦に変え、祀る先祖を限定して実施回数を減らし、供物の種類・量を減らす、複数の忌祭祀をまとめて行う、きょうだい一年ごとに交代して行うなど、チェサの形式面の合理化